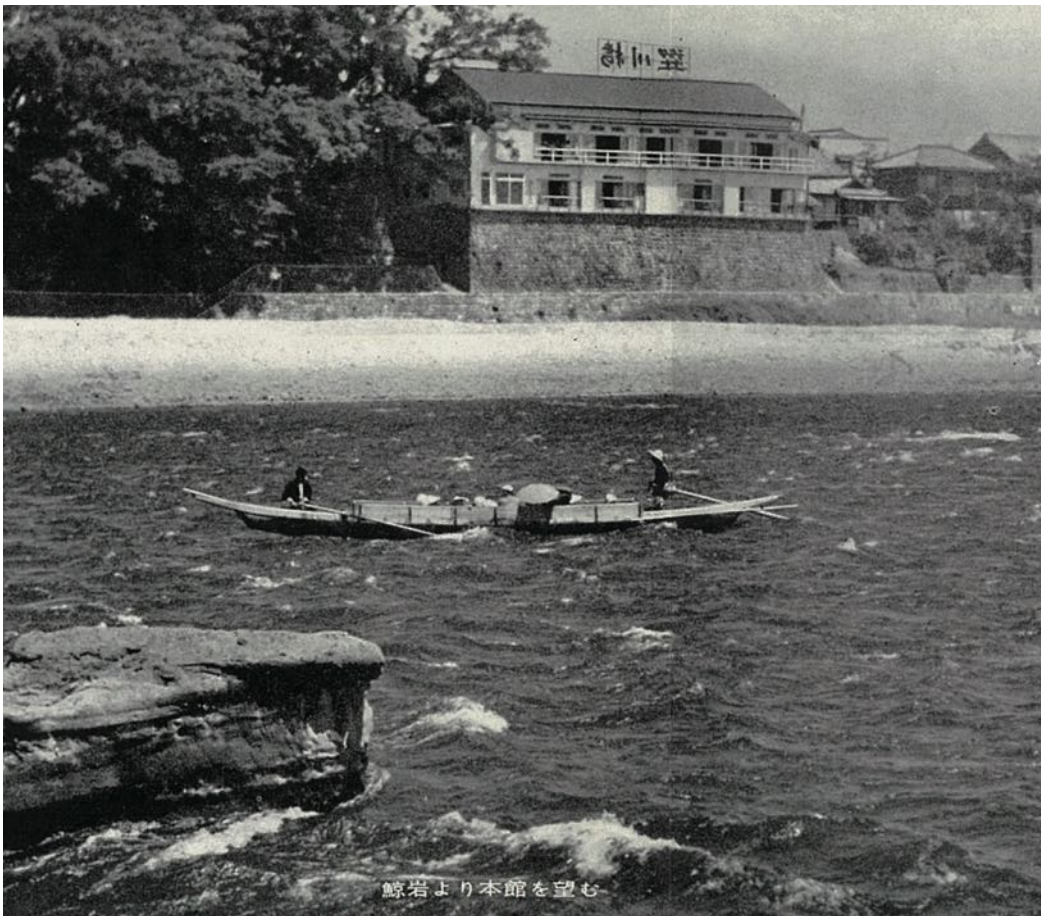
第5回

書かれた「この地」を読む

みのかもブックマーク



▲望川楼パンフレット掲載写真「鯨岩より本館を望む」

北原白秋の来訪（2）　吉植庄亮と共に

詩人・北原白秋は、昭和7年10月に再び美濃加茂に来ました。同行したのは歌人の吉植庄亮でした。庄亮が中央新聞社の文芸部長をしていた頃に二人は出会い、歌を通じて親交を深めます。庄亮は『農村随筆　雨耕抄（時代社：昭和19年）』に、二人は性格の相性も良く、何日旅行してもけんかにならず、おまけに「酒徒」だったとも書いています。庄亮の旅行の歌を集めた『風景（天理時報社：昭和18年）』には、太田を訪れた二人が宿泊した木曽川畔の旅館・望川楼で庄亮が詠んだ歌二首があります。

づぶぬれになり下り来る舟のたまゆらも
ここにとどまらず聲あげて過ぐ

づぶ濡れの川下り舟にたわやめのさほどの距離ならぬ顔の美しさ

庄亮はこの旅について「**北原白秋君と濱名湖、木曾川、飛彈山奥に遊ぶ。この行酒行脚に徹す**」と書きました。太田の祐泉寺には、酔って庭に入り込んだ白秋が、住職に私製はがきをもらい、懐に持っていた矢立で歌を書いたという逸話が伝えられています。

▲祐泉寺に建つ北原白秋の歌碑

吉植庄亮（1884-1958）

千葉県印旛郡（現印西市）に生まれる。東京帝国大学経済科卒業後、中央新聞社に勤務。歌人。第一歌集『寂光』の他、多数の歌集を刊行。衆議院議員。印旛沼の開墾や農場を経営するなど農業にも力を注いだ。

問みのかも文化の森　☎28-1110